

# 退屈な人生を 歩んでいたおっさん

taikutsu na jinsei wo ayundeita  
ossan, isekai ni tobasareru

## 異世界に飛ばされる

vol.  
**2**

AUTHOR 菊池快晴

illustration 岡谷



## 登場人物紹介

### ビービー

己の拳一つで戦う拳闘士。戦闘が大好きで、強者を求めて流浪の旅を続けている。

信条は「速さこそ強さ、」。

### ククリ

シガと行動を共にしているエルフの少女。優しく穏やかな性格で、知識も豊富。未知の体験にはしゃぐ無邪気な一面も。

### シガ

本作の主人公。前世は社畜だったが、チートスキルを授かり異世界に転移する。自由な暮らしに憧れており、様々な場所を気ままに旅するのが夢。

### きなこ

シガの従魔。頭の模様がチャームポイントでみんなの癒やし粹。大好物はうどん。

### グレース

雪国のフリーズ国で活躍する冒険者。無敗と名高い雪合戦の名手で、多くの民から尊敬されている。

### エヴァ

人間とエルフの間に生まれたダークエルフ。いつもマイペースでちょっぴり天然。「治癒魔法」という特別な魔法を扱える。



## 序章 キミウチシガの異世界転生

私の名前はキミウチシガ。性別は男性、黒髪黒目で、自他ともに認めるおじさんだ。元々はブラック企業の間管理職だったが、過労により死んでしまう。

しかし驚いたことに、神のような人物が現れて、二度目の人生を歩ませてくれたのだ。退屈だった私の生涯を知り、不憫に思ってくれたのかもしれない。

見知らぬ森の中で目覚めた私は、この異世界でかねてより夢見ていた旅をすることを決めた。そんな私は、神からいくつか特殊なスキルを授かった。

まず私は自分のステータスを確認することができた。さらに身体能力は遥かに向上しており、魔法まで扱えたのだ。

そして極めつけは『Nyanyan』を使うことができるというものだ。

Nyanyanは元の世界で存在していた、猫のトレードマークが特徴的な大手ネットショッピングサイトである。

私が使いたいと思うだけで視界上にNyanyanの販売画面が表示される。後は前世通り

購入するだけ。商品は、出現したブラックホールのようなものから手元に落ちてくる。

購入にはお金が必要だったものの、倒した魔物の素材や高値で取引されている鉱物などを、そのブラックホールのようなものに投げ入れることで所持金が増えていくのだ。

それらを使い、私は異世界を楽しんでいた。

そんな私に相棒が現れてくれた。

それはフェンリルと呼ばれる、かつて勇者御一行が引き連れていたという魔獣だ。

しかも、その風貌は非常に愛くるしい。

ほのかに青く、白いもふもふの毛並み。額には、炎を連想させるような模様が付いている。

子犬程度の大きさなのだが、実は戦闘状態になると大きくなるのがわかった。

私はその魔獣に『きなこ』と名づけ、今でも仲良く過ごしている。

私にとって、大事な相棒だ。

それから私は、『ククリ』と呼ばれるエルフ族の女の子と出会った。

彼女は奴隷として売られており、自由にしてあげたいと思い、衝動的に買い取ったのだ。

当然、私は彼女に何かさせるつもりはなかった。

けれども、彼女はどこへ行く当てがないことを知り、ともに行動するようになった。

彼女は魔法が得意なエルフ族でありながらも魔法が使えなかった。

それは故郷を人間に襲われた悲しみによるトラウマから来るものであったが、私と対話を重ねて、ついに魔法が使えるようになった。

彼女は異世界のことについても詳しく、聡明な彼女のおかげで何度も助けられている。

初めは少しの間一緒にいるだけだと思っていた。しかし、私たちは様々な事柄を乗り越えることで本当の仲間になった。

そうして旅を続け、私たちはとある女の子の護衛を頼まれた。

その女の子の名は『エヴァ』。

彼女は片方の耳だけが黒くとんがっている、ダークエルフ、と呼ばれる種族だった。

異世界では、エルフやダークエルフはプライドが高いことが多く、そのせいで他の種族からは嫌われているらしい。

よって、ククリやエヴァはできるだけ耳を隠して旅をすることになった。

私たちはその最中、短い間ながらも絆を深めて、非常に良い関係となった。

そして無事に彼女を目的地まで送り届け、任務は終わった——かに思えた。

しかしその後、エヴァを狙う悪党が出現した。

私たちは力を合わせて、その輩を倒すことに成功した。

その出来事がエヴァの決意を確固たるものにした。

このままじゃ駄目だ。もっと、強くなりたいと。  
 私たちはその願いを聞き入れ、彼女が強くなるまで、これからも仲間として行動することにした。  
 「みんな、これからよろしくな」  
 そして私たち三人と一匹は、これから世界を旅して回ろうと出発したのだった――。

## 第一章 みんなでひと休み

私たちが歩きで次の国へ向かっている最中、近くの湖から突如として魔物が飛び出してきた。  
 黒くて小さなマリモミみたいだが、目がギョロリと私たちを睨んでいる。

正直、めちゃくちゃ弱そうだ。

しかし、今日のは出発してから一度も魔物と出会っていない。

そして私はこのパーティーで一番の年長者である。

「エヴァ、ククリ、きなこ、私に任せてくれ」

たまに良いところを見せておきたい、というわけだ。

「シガ様、ですが――」

心配そうにククリが声を上げた。

「ここは大人である私に任せておくんのだ」

そう答えると、彼女が宝石のような赤い瞳で、尊敬のまなざしを向けてきた気がした。

「シガ、がんばれ」

そしてその隣でエヴァが一言。

抑揚がないところが、彼女の喋り方の特徴だ。

けれども私にはわかる。そこにはたった一人で魔物と立ち向かう、私への敬意が混じっていることが。

「がーう」

最後にきなこがいつも伸びた声を上げる。

いや、よく見るとあくびをしたのだ。昨日は夜更かししていたのだろうか？ だが、たまにはそういうときもあるだろう。

きつときなこも私を尊敬しているはずだと思いながら、剣を構える。

「私は強いぞ、マリモ魔物！」

声を張り上げると、右手の剣に魔力を込め、確認のため己のステータスを表示する。

『キミウチシガ』

レベル…30

体力…B+

攻撃…B+

魔力…A+

ステータス…溢れる高揚感、ちよつといいところを見せたい、おじさんの意地

装備品…A級装備（やや高い）、安全靴（やや硬い）、サバイバルナイフ、ロングソード

スキル…空間魔法Lv5、解析Lv4、短剣Lv5、気配察知Lv5、隠密Lv4、冷静沈着Lv5

格闘Lv2、君内剣Lv6、火魔法Lv4、水魔法Lv4、風魔法Lv4、土魔法Lv4、魔力糸Lv3

固有能力…超成長、お買い物、保管、時間停止、自動言語翻訳、魔獣召喚限界突破、能力解析、

並列思考、動揺耐性

レベルボーナス…自然治癒（中）、身体強化（中）

…ステータスが、いつも私の心を見透かしているような気がする。

まあそんなことはいい。初期と比べると、私のステータスは確実に上がっている。

「マリーモ！」

だが私が攻撃を仕掛けようとすると、マリーモは変な声を上げながら驚くほど巨大化した。三メートルはあるだろうか。

驚きのあまり息がヒュツとなる。

「シガ様、それは極稀に現れるという巨大マリーモ、マリーモです！ もの凄く強いと聞いたことが

あります！」

ククリの無情な情報が、私の心拍数をさらに上げた。

先ほど何か言いかけていたのはこのことだったのか。

「シガ、がんばれ」

しかし先程と一言一句同じエヴァの声援が、私を動かした。

「——おじさんの見栄を舐めるなよ」

小声で、誰にも聞こえない程度に呟く。

マリーモは巨大な両手を生やし、私を押しつぶそうと倒れ込んできた。

数秒後、私は押しつぶされてぺったんこになるだろう。

そんなことさせるものか！

「ハアアッ！」

私は横薙ぎ一閃、ロングソードを滑らせた。

剣が風を斬り、乾いた音が走る。

次の瞬間、マリーモを一刀両断していた。ただ剣を強く振りすぎたせいで、その勢いのまま、バレエダンサーのようにぐるぐると回転してしまう。

「マリーモオオオオ……」

しかし私の攻撃がクリーンヒットしていたのか、マリーモは断末魔の叫びを上げて身体を縮めていく。

そして、小さな黒い石に変化した。

これは、魔石、と呼ばれるものだ。

魔石とは魔力の結晶体で、魔物を倒して得られることもあれば、ダイヤモンドのように、石の中から採れることもある。

ただ魔物が落とす魔石は、魔物の種類によって特有の柄が存在するようで、討伐の証明としてギルドに見せるときに役立つのだ。

さらに売ればお金になるし、武器や防具への加工、アクセサリとしても使えるなど、用途は多岐にわた——おっと、目が回る……。

「シガ様、大丈夫ですか!？」

「あ、ありがとうククリ」

そこでククリが飛び出してきた。私を抱きかかえ、まるでペアスケーターのようになる。

だが彼女のおかげで回転が止まった。

「突然回転し始めたので驚きましたが、マリーモを驚かせながらの攻撃だったんですね!」

「……そうだ。よくわかったな。もしマリーモが分裂を繰り返す魔物だった場合に備えて、いつもより多く回ったのだ」

本当は違うが、つい見栄を張ってしまった。

だが彼女はそんなことには気づかずに続ける。

「凄いです! さすがシガ様です。マリーモの攻撃は凄くて、幾千もの冒険者が押しつぶされたと聞いています。なので、一人で立ち向かうシガ様を見て私は感動しました」

そんな凄まじい魔物だったのか? 知っていれば、みんなと一緒に戦って——いや、そんなことしない。

それほど危険な相手なら、やはり私は一人で戦っただろう。

「シガ、すごい」

「がうがう!」

エヴァときなこまで駆け寄ってきてくれる。

やはり持つべきものは仲間だな。私の二度目の人生は毎日が最高潮だ。

「あの黒い石をお金にしよう。以前に手に入れた黒い魔石は凄く高く売れたからな。——今日はご馳走にできるかもしれないぞ」

「がうがう！」

きなこをはじめみんな大喜びのようだ。

こんなところも、やはり愛らしい。

「いでよ、Nyanyasson！」

わざわざもったいぶって声に出さなくても、頭で考えるだけでNyanyassonは使える。

しかし、今日は勢いよく叫んだ。そういう気分だったのだ。

すると、視界にネットショッピングのウィンドウト、ブラックホールのような穴が現れる。

そこに例の黒い石を入れた。

途端にルーレットのようなものが出現して、数字がぐるぐると回る。

『計算中、計算中。——10000円ニヤーン！』

「なんだと!？」

私は目を疑った。

鉱物の中では、今まで換金した中でダントツに高い。

この残高はそのままNyanyassonでお金として使用可能である。

つまり、豪遊確定ということだ。

「喜べみんな、今夜はご馳走にするぞ！」

私がおじさんガッツポーズをすると、全員が嬉しそうにした。

ちなみに二人はNyanyassonの存在は知っているが、実際にウィンドウを見られるのは私だけなのだ。

「シガ様、鮭おにぎり天国がいいです！」

「私はチョコレート。お風呂に浸かれるぐらい」

「がう、がうがう」

久しぶりの宣言だったからか、みんなが思い思いの欲望を叫ぶ。

Nyanyassonで買える食事は非常に美味しい。

異世界の食事が口に合わないというわけでは決していないが、やはり現代の食事には素晴らしいものが多いのだ。

そのせいで、というべきだろうか、みんな現代の料理にハマってしまったている。

ククリは鮭おにぎりが大好物になった。

朝昼おやつ晩夜食でも構わないと言っている。

エヴァは甘い物が好きだ。今もとんでもないことを言っているので、大人として止めなければいけない。

ちなみにきなこは、うどんが大好きだ。

さっきの短い吠えだが、きしめんがいいと言っている。

食事の好みは千差万別だ。

各々が好きな食事をすることに異論はないし、精神的にも良いだろう。

しかし健康面を考えると話が変わってくる。

それにもうすぐ日が暮れる。ひとまずは野宿ができそうな場所まで歩き、メニューはそれから考えることにしよう。

魔物がいる世界、どこでも安全に眠れるというわけではないからな。

そしてそのまましばらく歩き、山のふもとにたどり着いた。

ここを抜ければ次の国だ。明日、早朝から出発すればいい時間帯に着くだろう。

夜の山は怖いからな。

そんなことを思っていると、ククリの声が聞こえてくる。

「シガ様、空から白いものが!？」

「これは——雪か」

いつの間にか、先程までとは天候がガラリと変わっていた。

異世界ではほとんど晴れだった。

雨もあるにはあったが、私の記憶では数えるほどしかない。

なのに突然の雪だ。

奥の山に目を向けると、先端が僅かに白い。

まさか次の国は……。

「シガ様、冷たいです!？」

「シガ、世界の終わり?」

「がうがう!？」

「みんな、雪を知らないのか?」

驚いたことに全員がこくりと頷く。

聞けばククリのいたエルフの里の天候は常に安定していたという。

そしてエヴァが暮らしていた国は干ばつ地帯だったとのこと。

きなこも……見た目が雪っぽいのが、雪のことは何も知らないらしい。

「これは、上空の雲の中の水蒸気が氷の結晶となり、溶けずに降ってきた氷の粒だ。怖いものでは



ないよ」

私は、つい得意気になって説明してしまった。こういったことをしてしまうのはおじさんの特徴かもしれないな。

申し訳ないと思っていたら、みんなが目を輝かせている。

「凄い。シガ様は何でも知っているんですね」

「すごー」

「はは、それほどでもないが、それほどでもあるよ」

元の世界なら誰でも知っていることかもしれないが、それでも嬉しかった。おそろくこの辺りが天気の変わり目なのだろう。

少しずつ雪が積もり始め、地面が白くなっていく。

「冷たいね、エヴァちゃん」

「クク、嬉しそう」

二人はとても楽しそうだった。

そういえば私も子供の頃は雪を見ただけで笑顔になった気がする。

あえて言うことではないが、大人になってからの雪は面倒だと感じることもしかなかった。

仕事へ行くのはいつも電車だったので、運行中止になるのかどうかニュースをチェックしなければ

ばならない。

ブラック企業だということもあり、その場合は徒歩で数時間かけて会社に向かう。滑って転べば怪我をしてしまう。

寒さのせいで関節も痛い。

しかし、エヴァとククリ、きなこにとっては人生で初めての雪だ。

楽しい気持ちのまま雪を楽しんでほしい。

私のようにネガティブな思考にならないように……。

よし、そうだ。

「今日の夕食なんだが、私のおすすりめでも構わないだろうか？」

食事というものには季節感を伴うものがある。

寒いからこそ食べたくなるものがあるのだ。

とはいえ、彼女たちもそれぞれ自分がリクエストしたものを楽しみにしていただろう。

以前、TKGこと卵かけご飯やカレーをおすすりめしたときは喜んでくれたが、今日はとうとうか。

けれどもそんな不安は、彼女たちの満面の笑みで吹き飛んだ。

「シガ様のおすすりめ大好きです！」

「私も楽しみ」

「がう！」

よし！

冬にとっておきの食べ物をみんなで食べるぞ！

そして雪も、季節も、たっぶり楽しんでもらう。

「ならばみんなで食べよう——おでんを！」

◇ ◇ ◇

おでんとは、かつお節や昆布でとった出汁に、醤油や塩で味を付け、大根、こんにゃく、練り物、ゆで卵などの具材を長時間煮込んだ日本の伝統的な冬の鍋料理である。

今どこぞ家庭料理として愛されているが、かつては今とは異なり、ファストフードだったのかなんとか。

「それからおでんというものは——」

「シガ様のおでん愛、素晴らしいです！」

私がおでん愛について語っていると、ククリが楽しそうにしながらもお腹を押さえていた。

エヴァは「きな、寒いねえ」と二人で抱き合っている。

さつきに続き、おじさんの悪い癖が出てしまった。

ついつい知識をひけらかしてしまう。

だが、私はおでん大好きおじさんなのだ。

なぜならおでんは、鍋なべでありながら一人でも気軽に食べられる料理だと思っているからだ。

家で作るだけでなく、コンビニのおでんや屋台やたいのおでんなど、一人でも様々な——ハッ、またゾーンに入ってしまった。

若者がお腹を空かせている。急がねば！

『お買い上げ、ありがとニヤーン！』

Nyanyanの食品の項目から、おでんセットなるものを購入した。

下ごしらえができている缶詰なども販売していたが、みんなに尋ねると調理過程も楽しみたいとのことだった。

食欲を刺激しげきされながらワイワイするのは、確かに楽しい。

「ではククリは大根を切ってくれるか。皮の剥き方などはわかるな？」

「はい！ おでん、楽しみです！」

「エヴァときなこはゆで卵を作ってくれ。熱湯はそこに用意している」

「任された」

ともに料理をしてきているので、みんな手際が良くなっている。

それぞれができることをしていく。旅で最も必要な連携だ。

私は、好物のはんぺんを八等分の三角形に切り始める。

ちくわも食べやすいサイズにし、こんにやくは両面に細かく切りこみを入れた。

出汁がよく染み込むようにだ。

すべての工程を終えると、あらかじめ用意していた鍋に投入して、ぐつぐつと煮込む。

ちなみに出汁はおでんの素もとを使っている。

何事も時短は大事だ。

鍋で煮ている間、寝床の準備を済ませていく。

異世界の人たちが旅をする際には野宿が基本だ。

しかし、私にはNyanyanがある。

ファミリータイプのキャンプ TENT を購入しているので、それを空間魔法を使って取り出していく。

開いたまま保管が可能なので、面倒な組み立てももう必要ない。

次々と取り出し、ひらけたところに TENT を設置する。

身体能力が向上しているので、まったく重さを感じない。

テントの中には毛布が敷き詰められており、いつもみんな川の字で眠っている。見張りについては必要ない。

私は気配察知というスキルのおかげで、魔物が近づくだけで目を覚ますのだ。

といっても、ククリ、エヴァ、きなこも私と同じくらい敏感だ。

よって、今まで就寝中に突然襲われる、ということはなかった。

ほどなくして、おでん鍋がぐつぐつと煮えてきた。

火の調節は魔法で行っており、私が手をかざすだけで強弱が可能になる。

私自身が便利おじさんなので、一家に一台シガがいると快適に過ごせること間違いなしだ。

「よし、みんな見てくれ。これが——おでんだ！」

私は、まるで自分の手柄のように鍋の蓋を開けた。

おでんが鍋の中でぎゅうぎゅう詰めになっている。まるで宝石箱だ。

大根やこんにゃくもよく染みているのか、色もいい感じだ。ゆで卵も、とっても美味しそうである。

「シガ様、とってもいい匂いがします！ それに、具だくさんで美味しそうです」

「私、おでん大好き」

ククリが嬉しそうでも嬉しい。

だがエヴァ、まだちよつと気が早いんじゃないか？

熱々で手が火傷するといけないので、私が全員に取り分けていく。

ちなみにきなこには専用のお皿がある。

子犬用の食器セットだ。当然だがフェンリル用なんてものはない。

少し高さがあり、ガツガツとおでんを食べられる。

きなこの消化器官の強さは人間以上なので、特に食べ物などを気にする必要はない。むしろ、お

じさんの私よりも元氣ハツラツだ。

この言い回しは、もしかして死語かもしれない。

おっと、またしても待たせてしまった。

熱々のまま食べなければ、それはおでんではない。

「ゆで卵は少し切り込みを入れてからほぐして食べてくれ。舌を火傷してしまうかもしれないからな。——さてみんなでいただきます！」

私の言葉が続いて、みんなが一斉に手を合わせる。

いつもなら大好きなはんぺんに手を伸ばすところだが、今日はそうじゃなかった。

「はふはふっ、熱いけど……凄く大根が美味しい」

「私のゆで卵、グッド」

自分の作ったおでんを幸せそうに食べてくれる仲間を見る。

これは何よりも幸せなことだろう。

ククリやエヴァ、きなこがいてくれるおかげで、私の異世界人生が最高の物語になってくれる。  
いる。

「がうつ!？」

「少し冷ましてあげよう。きなこ」

しかしきなこにとっては少し熱かったらしい。

猫舌ねこじたならぬ、犬舌いぬじただったのかもしれない。

しかし少し冷やしてからはこんにやくを気に入ってくれたらしく、つるつと食べ始める。

私の中でおでんといえば、コンビニや屋台で購入して家で食べるだけのものだった。

それでももちろん美味しいし、好物だと胸を張って言える。

けれどもやはり、みんなで囲むむおでん鍋に勝るものはない。

「シガ様、食べないのですか？」

「ああ、いただく」

まずは出汁をいただくと、ホッと落ち着く味だった。

温かい、まるで私たちの関係性のようだ。

大人にとっては面倒と感じる季節、冬。

しかしこの異世界の経験で、私にとって大きな変化がありそうだ。

「シガ様、熱あつかん爛らんもいい頃合いなんじゃないんですか？」

「そうだった。これはたまらなそうだ」

そしておじさんの嗜たしなみといえば、当然お酒だ。

おでんにはビールも合うが、私としてはやはり日本酒は欠かせない。

銘柄めいがに好みは特にないので、サイトのイチオシを買ってしまった。

とっくりは以前購入していたので、これまた熱湯で温めていた。

「おつぎしますよ」

「なんだか悪いな」

「いえ、おでんを作ったのはほとんどシガ様ですからね。これくらいさせてください」

ククリに熱爛ねつらんを入れてもらい、グイッと一口。

喉のどを熱いものが通り、胃袋がカツとなる。

鼻から抜ける日本酒の香りが、またおでんをより一層美味しくさせてくれた。

「シガ、私は炭酸の黒いしゅわしゅわが飲みたい」

そしてエヴァは、美味しそうに黒いしゅわしゅわの炭酸を飲んでた。

◇ ◇ ◇

「ん、テントが開かないぞ。どうしてこれは——おおっ、凄いな」

おでんをたらふく食べて早めに就寝した翌朝、驚きの光景が目飛び込んできた。入り口のチャックを開けると、そこは一面銀世界だったのだ。

テントは頑丈な造りなので問題はなかったものの、一夜にして相当な雪が降ったらしい。

思わず身震いするほどだが、異世界ではなく前世の北国とも言えるような光景だ。

「シガ様、声を上げてどうしたのですか」

「見てみる。凄いなぞ」

「——雪が、こんなにも!? ……とっても綺麗ですね」

「ああ、旅は驚きの連続だな」

私はエヴァときなこを起こしにいった。その間も、ククリはテントの中から外を眺めている。ここまで積もると思っていなかったんだろな。

「エヴァ、外が凄いなぞ」

「寒い。死んじゃう……きな助けて」

「がうがう……」

喜んでもらえると思いい、起こしたのだが、どうやら寒さに参っているようだ。

これはいけないと、私はすぐにNyanya<sup>ニャニャ</sup>son<sup>ソン</sup>を呼び出した。

お金とは、こういうときに使うものである。

早速、ウインターセールからインナーを購入する。

濡れても構わない、スキーやスノーボード用として取り扱っているものだ。

買う前は厚手で少し動きづらいと思っていたが、今は若者向けの、お洒落<sup>しゃれ</sup>で快適度も高いものがあるらしい。

それからペット用品に項目を移動させる。

犬用品、子犬用、洋服、冬、と検索していく。

そして、きなこにピッタリなもふもふのジャケットを購入した。

そういえば、きなこに服を着せるのは初めてだ。

「ククリ、こっちへおいで」

未だ目を輝かせている彼女を呼び、みんなで着替えていく。

エヴァもきなこもまだ目をこすっているものの、外に出るとやはり元気になった。

「きな、行こう」

「がう！」

二人は、ついさつきまで寒さで震えていたとは思えなかった。外へ勢いよく飛び出すと、積もっている雪を足でふみふみする。

忘れかけていた童心が、彼女たちを見ているだけで呼び起こされてきた。

そうだ。雪は、冬は楽しいものだった。

彼女たちは歩きたびに鳴る、聞いたことのない、キュッキュツという少し高い音に驚いていた。

そのため、私が説明する。

「それは雪鳴りだ。雪の結晶同士が足の圧力でこすれ合うことで高音が発生するんだよ」

エヴァときなは新鮮で楽しかったらしく、足跡をつけながらキヤッキヤツとテントの周りを走り始める。

私は、ちよつとだけ震えながらも立ち上がった。すると、ククリが私を見つめてくる。

「どうした？ 何かついているか？」

「いえ、シガ様に改めて感謝を伝えたいのです。私を連れ出してくださり、本当にありがとうございます。幸せでいっぱいです」

「はは、大袈裟だよ。それに私も同じことを思っている。もし一人だったら、どこかの街で手堅く

暮らしていただろう。おそらく、元の世界と変わらないような生活をしていたはずだ」

ククリには、私の前世のことも話している。言っている意味は伝わるはずだ。

「でも今は刺激があつて、最高の二度目の人生を歩んでいる。これからもよろしくな。頼りにしているよ」

「——はい！ シガ様、私たちもエヴァちゃんたちに続きましよう！」

満面の笑みで私の手を取り、一緒に遊ぼうと声を上げる。

おじさんの雪遊びはいかなものかと思っていたが、なかなかどうして、これが楽しかった。

だがしばらく遊んでいると、樹上じゆじやうにいる鳥の魔物を見つけた。

「——魔物だ」

白くて見えづらいものの、生き物なら誰もが持つ魔力を確かに感じる。

「シガ様、あの魔物はホワイトバードです。敵を見つけると仲間を呼ぶことで有名なので、気づかれずに仕留めなければ面倒なことになるかもしれません」

「なんだと……」

この雪に覆おほわれた場所では移動には時間がかかる。

しかし距離が遠い。気配を消すのは得意だが、雪の音を消すことはできない。

幸い、エヴァたちのことは警戒していないみたいだ。おそらく油断しているのだろう。そのとき、私はハッと思い出す。

過去の栄光、あの頃は『雪投げのシガちゃん』と呼ばれて、雪合戦はかなりの腕前だった。私の投げる雪玉は敵へ吸い付くように向かっていくのだ。

それはもう、まるでプロ野球選手だった。

おじさんというものは思い出が大好きだ。あの頃の俺は、と切り出すと大体数時間は思い出に浸れる。

私はできるだけ口にしなないようにしているが、心の中で過去を想うことはたくさんある。

そして今はその思い出が武器になるときだ。

「私が後ろへ回り、ホワイトバードの注意を引きましようか？」

「いや、任せてくれククリ。——この、雪投げのシガちゃんに」

「……え？」

ククリの呆けた顔をよそに、私は前かがみになりながら右手を地面に伸ばす。

柔らかな新雪をギョツと握りしめると、野球ボールほどの大きさに固めた。

そしてそこでなんとなくだが、魔力を付与してみようと考えたのだ。

剣に魔力を通せば、より切れ味が増す。

それは雪玉にも適用されるのではないだろうか？

ゆつくりと魔力を流し込むと、その場で勢いよく振りかぶった。

「第一玉——シガ投球！」

おそらくそこまで美しくはない格好で投げられた雪玉は、ホワイトバードにぐんぐん近づくと直撃した。

予想通りと言うべきか、魔力の込められた雪玉には魔法のような威力があったのだろう。

ホワイトバードは悲鳴を上げる暇もなく樹上から落ちる。

「シガ様、凄いです！ 雪玉を投げるなんて発想、私には到底できませんでした。さすが、シガ様です！」

おそらく元の世界であればありがちすぎる行為だったが、ここは甘んじて受け入れておこう。私の、名誉のために。

「それほどでもないぞ」

そんなククリの後ろでは、エヴァが私のことなど見もせず楽しんで雪玉をきなこに投げていた。雪玉を投げるなど、なんでもないことだと言わんばかりに。

「当たらないー」

「がうがう」

願わくば、ククリには後ろを振り向かないでほしい。

◇ ◇ ◇

遊び終えた後は、昨日の残りのおでんを朝食として食べることにした。

朝のおでんはやはり格別だった。

出汁がしっかりと染みていたので、みんな大喜び。

次のおすすめも楽しみしてくれるだろうな。

しかしいつまでものんびりはできない。

異世界の外は戦場と同じだ。私たちはキャンプに来たわけではない。

雪がさらに積もる前に次の国へ行かなければならない。

小さな山だが、できるだけ慎重に進む。

ここを抜ければ目的地である『フリーズ国』にたどり着く。

知っている情報としては、女性が強い国らしい。

カカア天下のようなものなのだろうか？

この言葉も、今ではあまり聞かなくなったが。

しかし雪が想像以上に積もっている。

これではかなり時間がかかってしまうだろう。

二日ほどかかる覚悟だったが、きなこが可愛い尻尾を見せながら前に出る。

「がう、がうがう！」

「任せてくれ、ということか？」

こちらに顔を向けて、自身の魔力を使用して巨大化した。

そして積もった雪をもともせず、ずんずんと進んでくれたのだ。きなこには天然のもふもふの

毛並みがあるから、寒さをそこまで感じないのだろうか。

ちなみに私が買ってあげた洋服は、破れないようにと事前に脱いでくれた。

気も遣<sup>つか</sup>える、なんていい相棒なんだ。

ちなみに道中何度か魔物と出会った。

そのたびに雪投げのシガちゃん<sup>へんりん</sup>が力の片鱗<sup>へんりん</sup>を見せてやる。

もし雪合戦が強いことで尊敬される地域があったのなら、私は王様にでもなれたのかもしれない。

「シガ様、フリーズ国でも商売は続けるんですか？」

「その予定だ。国によって求められるものは違うだろうから、まずは観光がてら住民が欲しがりそうな物を見極めていこう。魔物と戦ってお金を稼<sup>かせ</sup>ぐのも悪くはないが、直接、誰かのためになる物

を留意したい」

私はこれまでお金稼ぎのために、Nyanya<sup>ニャニャ</sup>son<sup>ソン</sup>で仕入れたものをこちらの世界で売る商売をしていた。

今まで私が販売したのは、シャンプー&リンスや紅茶、サバイバルナイフなど。多くが貴族御用達の高級品となっているもので、次は安価で街の人が気軽に扱えるような商品も取り扱ってみたい。

利益も大事だが、皆に手に取ってもらった方が私自身が楽しいからだ。それで稼げるなら誰も不幸にはならないしな。

「私は冒険者の資格を取る」

そこで隣にいたエヴァが鋭い目で言い放った。

そう、彼女は強くなるために旅をしている。

フリーズ国にも冒険者ギルドはあるだろう。

夢のために頑張っていたきたい。

きなこは……なんだろうか？ 後で、聞いてみよう。

「ククリはどうしたいんだ？」

「え？ わ、私ですか？ ……もつと世界を見て回りたい、ですかね？」

「それはもちろんだ。その上で、何かやりたいことを見つけていいんだぞ」

するとククリは頭を悩ませる。

彼女の良いところはたくさんある。気配りが上手なところ、聡明なところ、強いところ、優しいところ。

ただあまり欲がないのだ。

もつと、自分のしたいことをしてほしいと思うときがある。

山を進みながら、ククリはずっと考えていたらしい。時折唸<sup>うな</sup>ったりしながら、やっぱり答えは出なかった。

そのとき、フリーズ国と思われる街並みが目に飛び込んできた。

驚いたのは、遠くから見てもわかるほど雪の世界だったことだ。

今いる場所よりも遥かに雪が降り注いでいる。

まさかの雪国、なのだろうか？

想像もしていなかった出来事に驚きながらも、期待に胸を膨<sup>ふ</sup>らませる。

今までになかったものがたくさんあるだろう。冬に必要な物を販売すれば、きっと喜ばれるはずだ。

「ククリのしたいこともフリーズ国で見つかるといいな」

「そうですね。シガ様にそう仰っていただけて嬉しいので、私も考えてみます。——ですが、今のままでも幸せですからね」

「ああ、それは私もだよ。さあ行こう、フリーズ国へ」

「がうがう！」

さあて、どんな国か今から楽しみだ。

## 第二章 フリーズ国

「冒険者七等級のシガ様、ククリ様、魔獣のきなこ様、そしてお連れ様のエヴァ様ですね。経歴の確認が済み次第、フリーズ国への入国が可能となります。もうしばらく、お待ちいただけますでしょうか？」

私たちは、フリーズ国の門までたどり着いていた。

冒険者の等級は最初は十級から始まり、任務を達成するごとに、九級、八級と昇格していく。

身元確認の間も常に雪が降っており、兵士さんも帽子を被り、温かそうな服装に身を包んでいる。この国に近づいて最初に驚いたのは、国中をぐるりと囲んでいる外壁だ。

てっぺんが細く斜めになっている。

雪が積もらないようにしているのだろう。

また、民家の屋根も雪を落とすために下へ行くほど傾斜がきつくなっていた。

前世でも北の地方では「へ」の字の家が多い。

おそらく、それと似た工夫が施されているのだろう。

「シガ様たちのご滞在日数などをお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「特に決まっていはいないんだ。商人としての活動も兼ねている。こちらが、その証明書だ」

以前、紅茶セットなどを卸させていた貴族のギール様に一筆書いていただいたものだ。

本来ならば滞在日数など細かく伝えなければいけないのだが、兵士は驚いた様子だった。

「ありがとうございます。お貴族様のご紹介でしたら、宿泊先のご登録だけ冒険者ギルドにてお願いできますでしょうか？ 滞在日数に関しては半年まででしたら問題ございません。ただし、一カ月ごとにご連絡をお願いいたします」

「承知した」

元の世界ならビザなどがあつたが、こっちでは冒険者の資格さえあれば宿からもらう証明書だけで異国への滞在が可能となる。

だが当然、犯罪歴などは考慮されるので、悪人は入国を断られることもある。

また私たちは商人も兼ねているので、入国審査の項目が少し多い。

そのため、多くの人が私たちよりも先に中へ入っていった。

少し申し訳なく思っていると、エヴァが口をとがらせている。

「エヴァ、すまないな。中に入ったら、温かいものでも飲もうか」

「別にゆっくりでいい」

ちよつとだけだが、つんとした態度だった。

もしかして嫌われたのか？ そう思ったが、ククリが耳打ちしてくれる。

「お連れつて言われたのが不満だったみたいです。私たちは、冒険者の資格がありますから」

「……そういうことか」

おそろくだが自分は一人前じゃないと思つてしまつているのだろう。

もちろん、これはただの入国審査しんさでしかなく、兵士にもそんな意図はないだろう。

しかし、エヴァにとつては少し悲しかったんだ。

とはいえ、彼女には神様から力を授かつた私ですらも使えないものがある。

それは――。

「クク、足怪我してる」

「あれ？ 本当だ。もしかして、雪を歩いているときにすりむいちゃつたのかな」

「私に任せて」

「これくらいなら、放つておけば――」

「私に、任せて」

エヴァの圧が強く、ククリが負けてしまう。

兵士に見えないように身体を盾にすると、エヴァが両手をかざした。

すると、柔らかな光が溢れる。

傷痕きずあとはものの数秒でなくなり、完全に元の状態に戻つた。

『治癒魔法』。

エヴァは、人の傷を治すことができる。

この世界の魔法は、脳内で具体的にイメージが可能なものしか実現できない。

つまり人を治癒するならば、人体の仕組みを細かく知っていなければならぬのだ。

だが、科学が発展していないこの世界において、そんなことを知っている人はおらず、結果として治癒魔法は、都市伝説レベルの魔法という扱いになっている。

しかしエヴァだけは、なぜかそんな知識などなくとも治癒魔法が使える。

さらに普通魔法には詠唱えいしょうが必要なのだが、彼女の場合は念じるだけで良い。

以前この能力を狙つた悪党がいたほどの、すさまじい力である。

つまり、冒険者の資格なんてなくても、彼女は立派なのだ。ただ当人にとっては違うのだろう。

私も幼い頃に早く大人になりたかったことを思い出した。未成年はダメ、などと言われることがとっても嫌だったのだ。

大人にはそんな思いをからかわれることもあったが、私は真剣だった。

エヴァにとつて、冒険者になるということは大切なことに違いない。

能力は認めながらも、彼女の想いも大切に汲んであげよう。

「エヴァちゃん、ありがとうね」

「エヴァ、さすがだな」

「それほどでもない」

満足げに親指を立てる。そのポーズ、異世界にもあるのだろうか。

そういえば、私がやっていた気がする。

すると、兵士が声をかけてくる。

「無事に入国の許可が下りました。フリーズ国への渡航歴はございませんでしたが、案内人などはどうされますか？」

「案内人、というと？」

「国が管理している観光団体の者です。費用はいただきますが、宿の手配などもさせていただきますよ」

なるほど、旅行会社のガイド付きツアーのようなものか。

ありがたいことではあるが、自分たちの目と足で見ることもしみじみだ。

丁寧に断りを入れると、兵士は嫌な顔は一切しなかった。

「承知いたしました。それと、大変申し上げにくいのですが……」

「何でしょうか？」

「衣類の貸し出しなどは行っておりません。お早めに購入されたほうが、お身体のためかと……」すると兵士は、私の姿を見て不安そうな表情を浮かべた。

しかし私たちは一見薄着なものの、中にはNyanyan<sup>ニャニャソ</sup>ンで買った防寒着『猫極暖』を着ている。

私は寒がりなので二枚、ククリとエヴァは一枚。きなこは寒さに強い。

私は迷わず白にしたが、二人は黒がいいと言った。どうやら、今の若者は黒がスタイリッシュで好きらしい。

しかし、異世界にこんなものはないのだろう。よって、私たちがもの凄く貧乏に見えたのかもしれない。

丁寧に兵士にありがとうと伝える。というか、これはいい情報だ。つまり、猫極暖にゃんてんのような衣類は希少なだろう。

後に詳しく調べる必要があるものの、やはり雪国への訴求力そきゅうりょくの高い物を販売しよう。

「今年は大寒波だかんばとなり、朝夜が非常に寒くなっております。どうか、お気をつけくださいませ」

最後の兵士の言葉を聞いて、フリーズ国での商売の期待が高まる。

大きな門が開かれて橋を渡る。

国を囲う川は、驚いたことに凍っていないかった。

今の気温ならありえない光景だ。おそらく、魔法か何かを用いているのだろう。

ようやく街の全貌ぜんぼうが見えてくる。

それは、確かに素晴らしい雪国だということがわかるほど、美しい光景だった。

「凄い。——馬車がソリになっているのか」

乗り合いの馬車が車輪式ではなかった。ソリになっており、馬は透き通るほど真っ白の毛並みだ。

道路に積もった雪をもともせず、ぐいぐいと進んでいる。

そして、どの家にも煙突えんとつがあった。

白い煙がモクモクと先端から出ていることから、中に暖炉だんろがあるのかもしれない。

街人もみんな厚着しているし、抜き身の剣を持っている人もいない。全員が鞆たもとにピッタリ収めて

いるところを見ると、凍らないようにしているのだろう。

気づけば心拍数が上がっていた。私は興奮している。

異世界に少し慣れたと思っていたが、まだまだ世界は広い。

まったく、旅というものはやはり最高だな。

「さて、これからの行動は何をしようか、ククリ」

「え、わ、私ですか!？」

「君は私よりも聡明だからな。責任を負わせるわけじゃないが、ククリならどう思うのか聞きたいんだ」

旅の行動を決めるのは案外大変だ。野外では魔物もいるので私が先導することも多いが、ククリは様々なことを深く考えられる。

お互いに支え合うことが、楽しく旅をする秘訣でもあると私は思う。

「クク、決めて」

エヴァも彼女にお願いした。どうやら、私と同じ気持ちらしい。

ククリは、少しだけ考えて口を開く。

「でしたら、宿を決める前に身体を温めるのはどうでしょうか？ おそらくですが、雪国ならではの熱々のスープがあると思います。そこでお店の特産物や商品なども分かれば、今後、シガ様が販

売する商品も決まるかもしれません」

なるほど。休憩しつつまずは情報を集めるということか。

「それから観光がてら宿を決めます。——その翌日は冒険者ギルドへエヴァちゃんの冒険者資格を申請していく……はどうですか？」

不安そうに、どこかお伺いうかがを立てるように私たちの顔を交互に見るククリ。

私からすればこれ以上ないほど素晴らしい案だと思った。

そしてエヴァも、同じだったらしい。

「最高、クク」

「同じく異論なしだ。熱々のスープ、きつとあるだろうな。ちょうど肌寒いと思っていた。さあ、フリーズを楽しもう」

「——そう仰っていただけでよかったです！ ではみんなで行きましょう！」

やはりククリは頼りになる。私たちは対等な仲間だが、頼れる部分は素直に甘えるべきだ。

それが彼女の成長にも繋がるだろうし、お互いにとっても良いと思う。

ククリは自分に自信がない。こういった選択をすることで、どんどん明るくなっていつてくれるといいな。

「シガ様、お気遣いありがとうございます」

だがそんなおじさんの考えはククリにお見通しだったらしい。

少しおせっかいが過ぎたかなと思いつつも、先頭で歩くククリが頼もしく見えた。

「がう、がうがう」

「どうしたきなこ。え、足が冷たい？」

「がう」

「よし、私の頭の上においで」

「がう！」

そして新しくわかったことがある。

長時間、雪の上で歩くのはきなこもつらいと言ったことだ。

そしてほんのり湿った肉球が私の髪をじんわりと濡らす。

頭皮のダメージはいささか心配だったものの、きなこの足が守られそうでは何よりだ。

そのまましばし歩いてスープの露店を見つけたので、そこで早速買ってみることにした。

「はいよ！ これがフリーズ名物『雪解け芋いものドロつとポタージュ』さ！」

恰幅かっせの良いおばさんが、私たちにカップに入った熱々のスープを手渡してくれる。

最初はお店に入ろうかと思ったのだが、雪にもかかわらず屋台が多いため、外で食べるのも新鮮

だなど話がまとまった。

移動販売車にはあまり見られない屋根があり、近くにベンチも設置されている。私たちは五分ほど並んで商品を購入した。寒さで手をこすり合わせたりしていたが、住民にとってはこの程度は日常茶飯事なのだろうか。

「シガ様、見たこともないほど白いお芋ですね」

「確かに。しかし、美味しそうだ。——さあ、みんなでいただきます」

カップは、小型のアイスクリームが入りそうなほどの大きさだ。

木製のスプーンがついているので、中に入った芋をほぐしながらスープに溶かす。

そしてカップのフチに口を付け、ごくごくと口に含む。

想像していたよりも熱かったものの、芋の柔らかな味わいと甘みが口いっぱい広がる。

後はミルクだろうか。

チーズもほんのり入っていて、乳製品が見事にマッチしている。

「はあ、身体の内側からぽかぽかと温まりますねえ」

「そうだな。エヴァ、少し冷ましたぞ」

「ありがとう——美味しい」

エヴァときなこは熱いのが苦手なので、適温にしてから飲ませてあげる。

それでも少し熱かったみたいだが、味は気に入ってくれたようだ。

みんなでスープを味わっていると、おばさんに話しかけられる。

「あんたたち、旅人かい？　あまり見ない格好してるね」

「そうなんです。世界を旅して回っていて、この国にも初めて来ました」

「へえ、そうなのかい？　——なら、おまけしなきゃね」

おばさんは、そう言いながら雪解け芋そのものを手渡してくれた。

アルミホイルのようなものに巻かれていて、ほくほくで熱々だ。

食べてみると、これまた味わい深い芋の香りが鼻を抜けていく。

ホロホロで、スープよりも味が濃くて美味しい。

「最高に美味しいです。お気遣い、ありがとうございます」

「はは、喜んでもらえて何よりさ。にしても、大変なときに来ちゃったけどねえ」

「大変？　何がですか？」

「今年は歴代でも最強の大寒波なのよ。今日はまだマシンなほうだけど、夜は冷え込むよー」

そういえば兵士も同じようなことを言っていた。

今でも相当な寒さだが、夜はさらに温度が下がるのか。

失礼かもしれないが、異世界の布製品は品質がお世辞せじにも良いとは言えない。

Nyan<sup>ニヤ</sup>yan<sup>ニヤ</sup>son<sup>ソン</sup>でウェアを購入し、インナーに猫<sup>にゃ</sup>極<sup>ごく</sup>暖<sup>ぬる</sup>を着ている私たちですら寒さを感じる。  
「がう、がう」

「寒いかな？ 待ってなさい」

きなこにも再び服を着せてあげた。どうやら通常形態、つまりは子犬フェンリルモードだとそれなりに堪えるらしい。

だがこんな状況だからこそ、私の商人魂に火がついた。  
ついでに生活様式を尋ねておこう。

「煙突があるみたいなのですが、この国では暖炉が主流なのでしょうか？」

「おや？ 初めてフリーズに来たわりに詳しいんだね？」

「雪が降る地域の友人がいたもので」

「へえ、そこもフリーズと同じなんだね。そうさ、建物のほとんどには暖炉が付いている。お貴族様の家はしっかりと造りだからいいけど、あたしたちのような平民の家は寒くてね。ただ、このまま気温が下がり続けると、薪<sup>まき</sup>が買えなくてね」

「薪ですか？ そうか、暖炉にくべるんですね」

「今は薪が高騰<sup>こうとう</sup>しててね。ここだけの話、お貴族様が高値で買い取るのよ。おかげであたしたちは大変さ。できることは、たくさんポタージュを売って、これ以上寒くならないようにって願うばか

りだねえ」

そんなおばさんの嘆<sup>なげ</sup>きに、私はポタージュのおかわりで答えた。

大変なときに来てしまったなと思いつつも、何か手助けはできないだろうかと考える。

やはりNyan<sup>ニヤ</sup>yan<sup>ニヤ</sup>son<sup>ソン</sup>を利用した販売だろう。猫<sup>にゃんこ</sup>極<sup>ごく</sup>暖<sup>ぬる</sup>のようなものは売れ行きもよさそうだが、あまり高価な商品も売っても意味がないしな。

やはりもう少し情報を集めたほうがよさそうだ。

そう思っていると、隣にいたククリが声を上げる。

「シガ様、熱々アイスクリームつてのがありますよ！」

「なん、だど!?」

「気になる」

それから私たちはひとまず食事を楽しむことにした。

冷たいバニラアイスに熱々のソースをかけることで、なんとも言えない甘みが倍増するのだ。

ほどよい熱さと冷たさが非常に美味しかった。

食事を堪能<sup>たんのう</sup>したあとは、改めて街を巡っていく。

みんな厚着で帽子を被っていることもあって、エヴァとククリの耳も隠れてちょうどいい。

二人にとってもストレスがないのは、何よりも良いことだ。